「子ども中心・未来志向・地域密着」をキーワードにした学校の運営

１　子どもたちのために【子ども中心】

第４期群馬県教育振興基本計画「群馬県教育ビジョン」（計画期間：２０２４年４月～２０２９年３月）では、最上位目標に「自分とみんなのウェルビーイングが重なり、高め合う共生社会へ向けて － ひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける『自律した学習者』の育成 －」を掲げ、自分で考えて、自分で決めて、自分で動き出す「自律した学習者」であることを求めています。

「自律した学習者」を育成するには、「個別最適な学び」を充実させなければなりません。その際、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないように留意しなければなりません。そのためには「協働的な学び」を充実させなければなりません。ただし、「協働的な学び」が「同調圧力」によって集団の中で個が埋没してしまわないように留意しなければなりません。同調圧力が働かないようにするためには「正解主義」からの脱却が必要となります。

つまり、これからは正解のない課題に対して多様性のあるチームで解決していく学習活動を展開することが大切になります。このような学習活動を展開するために、問題解決的な学習を行い、当事者意識をもたせて「子ども中心の学び」の実現に努めたいと思います。

２　未来に向かって【未来志向】

グローバル化の進行やＩｏｔ、ビッグデータ、人工知能（ＡＩ）等の技術革新の進展、そしてＳｏｃｉｅｔｙ５．０（超スマート社会）の到来などが叫ばれてから久しいが、現在それらのうちのいくつかが実際の生活に取り入れられたり、そう遠くない将来に実現したりするようになり、子どもたちが１０年先、２０年先、そして更にその先の変化の激しい社会を生き抜いていくことができるようにすることの重要性がますます高まっています。

子どもたちが充実した「今」を生きるようにすることも大切ですが、それとともに、大きく変化するこれからの社会を生き抜き、「未来」を創造する資質・能力や態度を身に付けるようにする教育を展開する必要があります。そのためには、教育の本質を踏まえつつ、思い込みや決め付けのもととなる固定観念にとらわれずに社会の変化に柔軟に対応していくことができるように、「不易と流行」の両方の側面を見据えなければなりません。

予測困難な時代ですが、その中においても１０年、２０年、そして更にその先を見つめ、社会の変化に遅れをとることなく時代の流れを先取りし、しかし、物事の本質から外れることなく確かな未来を築いていく「未来の創り手」となる人材の育成に努めたいと思います。

３　地域社会とともに【地域密着】

従来からの日本型学校教育は、「知・徳・体」のいずれについても、その大半を学校教育が担ってきました。日本型学校教育が優れていることは、国内はもとより、世界でも認められているところですが、その一方で、学校の肥大化が指摘され、「働き方改革」が叫ばれるようになり、学校教育の根幹部分を維持するため、欧米型学校教育を一部取り入れた「令和の日本型学校教育」への転換を図っていく必要があります。

「令和の日本型学校教育」への転換を図るためには、「知・徳・体」のうちの「徳」と「体」をこれまで以上に家庭や地域に担っていただく必要があり、コミュニティ・スクールとしての取組をいかに充実させていくかがカギとなります。けれども、それは学校が担ってきた役割を家庭や地域に丸投げするのではなく、子どもたちの健やかな成長という共通の目標に向かって学校・家庭・地域社会が一体となって取り組むことを意味します。

昨年度からコミュニティ・スクールとなったことを生かして、地域と密着し、地域とともに「地域の子を地域で育てる」教育活動を展開し、地域社会のために活躍する人材の育成に努めたいと思います。